空洞

美しかったのは雲だった
夏の雲だった

僕はぽつねんとホームに立っていた
誰も僕に目を向けはしなかった

うち捨てられた淋しさというものを
僕は今、初めて感じていた

かつては、孤独の中に居てさえ
他人(ひと)に助けを求めたいと思ったことなどなかったのに

孤独という奴に、僕は棄てられたのだ
いや、僕が棄てたのだ

そう、僕の中に僕の居場所はない
そして、僕が切望し、実現したこの世界の中にも・・・

「求めよ、さらば与えられん」
その但し書きを僕は読んではいなかったのだ

それは夏の雲だった
僕はホームに棄てられていた

(1991.6.5)